

「テニススポーツクラブ会員の社会的特性」

鳴川 英生

Social Characteristics of Tennis Club Members

Hideo Narukawa

Abstract

Recently the commercialized sport clubs has been developed in Japan. Among these sport clubs, tennis clubs play an important social role because of their number of participant.

In this study, it attempt to ciarify the social characteristics of the tennis club member by means of questionnaire. The survey was performed on 750 tennis club members in December 1 to 25, 1981. This survey was divided into the following six categories: social attribute, sport background of each sport club member, physical health of each sport club member, regular or extra members, future trend of sport club.

The social characteristics of tennis club member were summarized the followings;

1. Many members were at 20 or 30s. Main types of occupation were a salaried worker for male and a housewife for female, respectively.
2. About a half of the subjects has practiced tennis for less than three years.
3. Main purposes to participate in tennis club were the pleasure or health.
4. Most members participate in tennis practice one or two days a week.
5. The time required for going to tennis club was under 30 minutes one way.

6. About 65% of coat used in tennis club were hard coat.
7. Seventy% of subjects got on injury by tennis practice.
8. Seventy% of the regular subjects registered as a regular member at the beginning. However, 30% of these subjects exchanged into a regular member from an extra member.
9. Most club members answered that tennis club would develop quantitatively or qualitatively in the future.

I. 緒 言

今日、わが国における社会体育活動の隆盛には目を見はるものがある。それは、多くの人々が自分の余暇時間に健康や体力づくりをしたり、社交をしたり、さらには、生きがいづくりなどの目的のために様々な体育・スポーツ活動に日頃親しんでいる姿がいたる所で多く見られるようになったことを示している。一般に、人々が学校を出てから社会で様々なスポーツ活動に参加する形態としては、大きくは、次の二通りのことが考えられる。すなわち、個人で自由きままにする場合と、何らかのクラブや同好会に入って仲間とともにする場合がある。特に、最近では、一人でやることもさることながら、地域社会の形成やスポーツの仲間づくりの面からも後者のクラブスポーツへの期待が関係各方面から要望されている。むろん、住民のクラブスポーツへの参加意欲についても、総理府が昭和54年10月に行った体力、スポーツに関する世論調査の結果を見て判る通り、現在のクラブ同好会への加入状況は加入している者と今後加入の意志を持っている者を含めると全体の約4割を占めるなど、近い将来においてクラブスポーツへの参加状況が増々高まることが予想される。ともあれ、生涯スポーツや健康、体力づくりの推進の立場から多くの期待が寄せられるスポーツクラブのあり方が注目される。さて、わが国のスポーツクラブ事情についてであるが、過去の社会体育の発展の経緯を見て判る通り、その多くが学校や職場の運動部が中心となり現在のスポーツクラブと呼ばれる集団の母体を形成してきた。しかしながら、最近では地域社会の人々を母体としたクラブも出現しその数も増大している。さらには、幼児、

児童を対象として出来たスイミングクラブの成功例や現代社会人の健康、体力志向を契機として引き起ってきた、いわゆる営利を目的とした商業スポーツ産業としてのアスレチッククラブやテニスクラブの存在を見逃す訳にはいかないであろう。

また、こうしたスポーツクラブを核としたわが国の社会体育活動の発展を願う意味で、そのクラブ会員や広くは地域社会に対して機能すべきクラブ集団のあり方を求めて除々ではあるが体育、スポーツ関係者の中でもスポーツクラブ研究に着手し、その成果も出てきている。しかしながら、それらの研究の対象となっているクラブの多くは地域や職場におけるものが中心であり、いわゆる商業スポーツクラブ⁴⁾⁵⁾についての研究は皆無に等しい。とはいうものの、現実の社会体育活動の中では、商業ベースのスポーツクラブを利用する人も多く過去に高額の入会金や会費を徴収して入会が可能であった商業スポーツクラブでも、現在ではいかに人々に気軽に入会してもらいスポーツに親しんでもらうかといった、いわば一部の者から大衆の中に根付くクラブづくりを目ざす方向でその集団としての存続、発展を願っている気運さえある。このような意味からは、公的機関のクラブであれ私的機関のクラブであれ、その参加者のスポーツ欲求を充足させることでは共に重要な存在意義があると同時に、そうした商業スポーツクラブの社会的な役割、機能をも明らかにして置く必要があらう。その場合、商業スポーツクラブといっても様々なものが考えられるのであるが、日常的に実施されるもので先の総理府調査などからも今後の実施志向が比較的高い硬式テニスクラブ（以下「T・C」と略す）を研究の対象とした。現在、日

本庭球協会に加盟、登録されているT・Cの数やそこでの会員の实態についての資料はないが昭和53年4月時点で公表されたT・Cの数は全国431クラブであり、それが今日に至っては急増しているものと考えられる。とにかくマスコミによる話題の提供やテニス自身がもつ楽しさなど様々な要因が相まって今日のテニスブームを創造している。しかしながら、出来たがすぐに崩壊するクラブもあれば、逆に収容しきれない程の会員を有するクラブもある。それらいずれの場合においても今後さらにテニス愛好家が増加するとなれば、いかに会員や地域社会のために機能し得るクラブに成っていくかがテニスはもとより、わが国の社会体育や生涯スポーツの発展のために重要な意味を持ってくる。したがって、本研究においてはそのための基礎的研究とし、今日の商業スポーツの中でも急増の途にある硬式テニスクラブのうち、東海4県下（愛知、岐阜、三重、静岡）の著名なT・C会員の社会的特性を明らかにするとともに、今後のT・C存続、発展に残された諸問題を検討しようとしている。

II. 方 法

本研究においては以下に示す「テニスクラブ参加者の意識調査」を実施した。

1) 調査内容

本調査では、現在のT・C会員の社会的特性を

明らかにするため表1に示す。大きくは、1. 社会的属性、2. 過去のスポーツ経験、3. 現在のクラブ参加状況、4. 健康と身体的障害、5. スクール生とクラブ会員、6. 今後のテニスブームの動向など6つの調査カテゴリー別に合計31項目について実施した。

2) 調査方法及び対象

本調査は、1981年12月1日～12月25日までの間に、東海4県下（愛知、岐阜、三重、静岡）にある商業ベースのT・C計16クラブに参加するクラブ会員（正会員、スクール会員を含む）750名を対象に、所定の調査内容で質問紙法を用いて実施された。

尚、本調査標本数と有効回収数は表2に示すようである。

そして、調査結果の計算処理はすべて名古屋大学大型計算機FACOM-M200を用いて行なわれた。

III. 結 果

では、各々の6つの調査カテゴリー別の結果について述べていこう。

1. 社会的属性

まず、社会的属性として、ここにおいては性、年齢、職業、居住地を取り上げ、さらにテニススポーツクラブにおける会員の種類について述べる。

表3は性別について示しているが、女性の方が6割とやや多くなっている。年齢については、20

表1. 調 査 内 容

調 査 条 件	調 査 項 目
1. 社 会 的 属 性	①性 ②年齢 ③職業 ④居住地 ⑤会員の種類
2. 過 去 の ス ポ ー ツ 経 験	①有・無 ②時期 ③種目 ④軟式テニスの経験の有無 ⑤最初にテニスを 験した場所 ⑥最初に指導してくれた人 ⑦テニス歴
3. 現 在 の ク ラ ブ 参 加 状 況	①テニスを始めた目的 ②入会動機 ③クラブ活動の目的 ④週あたりの参加日数 ⑤クラブまでの交通時間、方法 ⑥利用コートの種類 ⑦マスターしたい技術 ⑧出場試合の種類
4. 健 康 と 身 体 的 障 害	①練習前後の準備・整理体操 ②身体的障害の有無 ③身体的障害部位 ④食欲 ⑤睡眠 ⑥仕事
5. スクール生とクラブ正会員	①クラブ正会員になるまでの過程 ②スクール生の正会員への移行意志 ③理由
6. 今後のテニスブームの動向	①テニスブームの原因 ②今後のテニスブームのゆくえ

表2. 調査対象クラブ数及び回収率

地 区	愛知	岐阜	三重	静岡	計
N・% クラブ数	6	2	4	4	16クラブ
調査対象数	400	100	100	150	750 部
有効回収率	263	98	98	130	589 部
回収率(%)	65.8	98	98	86.7	78.5%

オ～29才が（38.4%）と一番高い割合を示し、20才～39才までを合わせると約7割にも達する。しかし、60才以上の方が若干ではあるが、テニスを行っている場合が見受けられた。次に、職業については、事務従事者、主婦が高い割合を示している。居住地については都市が（52.2%）と半数を示しており、次いで地方都市（30.4%）となっている。会員の種類については、テニスクラブ正会員が（48.6%）、テニススクール会員が（42.4%）という、同じような割合を示しているが、男性ではクラブ正会員が、女性では、スクール会員の方が若干高い割合を示している。

これらのことから、社会的属性については女性の割合がやや多く、20才～39才を中心に、事務従事者などのホワイトカラーの参加が多くなっている。会員の種類については、全体的にはクラブ正会員、スクール会員共約半々であるが、男性ではクラブ正会員、女性ではスクール会員の方が若干多くなる傾向を示している。

表3. 性 別

カテゴリー	男	女
N・%		
N=588	237	351
%	40.3	59.7

2. 過去のスポーツ経験

過去のスポーツ経験については、テニスも含めた過去のスポーツ経験と、テニスについての過去の経験について述べる。

まず、過去にスポーツをやっていたかどうかについては、（83%）が有と答えている。その時期については、中学校時代が高い割合を示し、次いで小学校時代となっている。その種目についてみると、スキーが（13.0%）と高い割合を示してい

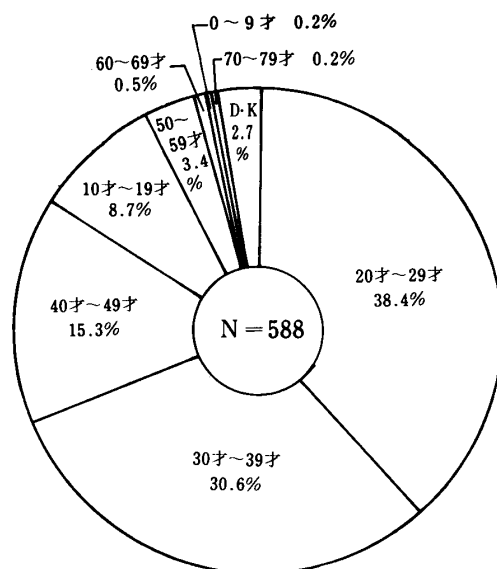


図1 年 令

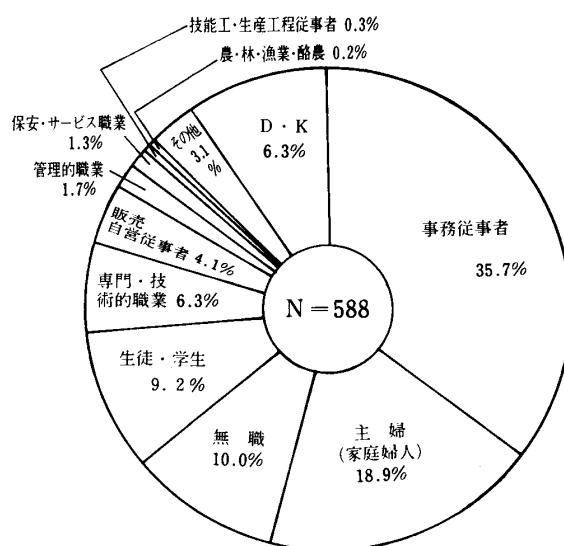


図2 職 業

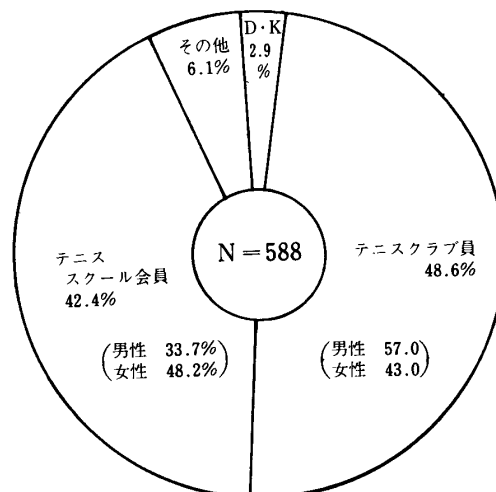


図3 会員の種類

表4. 居 住 地

カテゴリー N・%	都市にある	地方都市 にある	田舎にある	D・K
N=588	307	179	65	37
%	52.2	30.4	11.1	6.3

るものの、それ以外は、多種目に分布している。

軟式テニスの経験については、約4割が有となっている。次に、最初にテニスを経験した場所についてみると、学校が(38.9%)と一番高い割合を示し、現在のテニスクラブ(29.4%)がその次に高い割合を示している。最初に指導してくれた人は、コーチ(39.6%)、友人(23.6%)、学校の先生(20.2%)となっている。テニス歴については、1年以上が(27.9%)とやや高い割合を示しているが、1年以内、3年以上、5年以上が約2割ずつと同じような傾向を示している。さらに

テニス歴をクラブ正会員、スクール会員との差で見るとクラブ正会員では、3年以上がやや高い割合を示しているが、スクール会員では、1年以上あるいは1年以内が圧倒的に高い割合を示している。以上のことから、過去のスポーツ経験については、ほとんどが中学校時代において何らかのスポーツを経験している。さらに最初のテニス経験については、学校、現在のテニスクラブが多く、指導者もコーチや学校の先生となっている。テニス歴をクラブ正会員、スクール会員の別で見るとクラブ正会員の方が長期に渡っている。

表5. スポーツ経験の有無

カテゴリー N・%	は い	いいえ	D・K
N=588	488	99	1
%	83.0	16.8	0.2

表6. スポーツ実施時期

カテゴリー N・%	4才～5才	小学校 時代	中 学 ～	高 校 ～	大 学 ～	社会人にな って	結婚して から	D・K
N=488	19	162	210	56	13	20	8	0
%	3.9	33.2	43.0	11.5	2.7	4.1	1.6	0

表7. ス ポ ー ツ 種 目

カテゴリー N・%	硬・軟 野球	ソフト ボール	バスケット ボール	バレー ボール	サッ カー	ラグ ビー	硬式 テニス	卓 球	バドミントン	柔 道	相 撲	スキー
N=588	21	17	4	24	2	1	1	13	6	1	1	77
%	3.6	2.9	0.7	4.1	0.3	0.2	0.2	2.2	1.0	0.2	0.2	13.0

カテゴリー N・%	スケート	水 泳	ヨ ッ ト	陸上競技	体 操	自転車 競技	登 山	アーチェリー	民謡・ ダンス	そ の 他	D・K
N=588	5	20	2	15	1	1	3	1	4	73	295
%	0.9	3.4	0.3	2.6	0.2	0.2	0.5	0.2	0.7	12.3	50.1

表8. 軟式の経験の有無

カテゴリー N・%	は い	いいえ	D・K
N=588	229	357	2
%	39.0	60.7	0.3

表10. 最初に指導してくれた人

カテゴリー N・%	家族 の者	コー チ	友 人	学校の 先生	その他	D・K
N=588	41	233	139	119	54	2
%	7.0	39.6	23.6	20.2	9.2	0.4

表9. 最初にテニスを経験した場合

カテゴリー N・%	学 校	会社の コート	他 の テニス クラブ	現在の テニス クラブ	その他	D・K
N=588	229	60	84	173	38	4
%	38.9	10.2	14.3	29.4	6.5	0.7

表11. テ ニ ス 歴

カテゴリー N・%	1年 以内	1年 以上	3年 以上	5年 以上	10年 以上	D・K
N=588	118	164	128	113	61	4
%	20.1	27.9	21.7	19.2	10.4	0.7

表12. テニス歴

カテゴリー N・%	1年 以内	1年 以上	3年 以上	5年 以上	10年 以上	D・K
テニスクラブ員 (N=286)	7.0	21.0	29.4	24.1	17.8	0.7
テニススクール員 (N=250)	34.8	38.0	15.2	10.4	1.2	0.4
その他 (N=36)	22.2	8.3	13.9	38.9	13.9	2.8

3. 現在のクラブ参加状況

まず、テニスを始めた目的については、楽しいからが約半数と高い割合を示し、次には健康管理のためとなっている。現在のクラブへの入会動機では、近くで便利だからが最も高い割合を示しており、次に人のすすめがあったからとなっている。入会動機を性別でみても男女共近くで便利だからが高い割合を示している。クラブ活動の目的としては、「楽しみを第1に考えている」が半数以上を占める高い割合を示しており、「楽しみと勝つことを同じ程度に考えている」が、その次に高い割合を示している。性別でみると、女性は、同様の傾向を示しているものの、男性においては、「楽しみと勝つことを同じ程度に考えている」が一番高い割合を示している。クラブへの週あたりの参加日数についてみると1日あるいは2日が約3割ずつを占めている。クラブまでの交通時間とその手段については、約6割以上が30分以内と比較的短かく、大多数が自動車となっている。これらのことから、テニスを始めた目的と現在の活動目的が、楽しみ志向というように一致しており、活動意欲を高めている。さらに入会動機に関しては、近くで便利と交通の方法を一番にあげている。その交通方法に関しては、自動車で30分以内と比較的便利であり、週に1日～2日程度参加している。

次に、利用コートの種類についてみると、ハードコートが(64.8%)と最も高い割合を示しており、順に、クレーコート(21.1%)、アンツーカーコート(1.2%)となっている。マスターしたいテニス技術については、バックハンドのグランドストローク、サーブ、ボレーが同じ様な割合を示し、次にフォアのグランドストローク、スマッシュの順になっている。さらに、出場試合の種類についてみると、いずれもあまり高い割合を示し

ておらず、試合経験の少なさが起因しているが、その中でも、他のテニスクラブとの対抗戦が(21.4%)ながら一番高い割合を示している。出場試合の種類をクラブ正会員とスクール会員との違いでみると、どの種類の試合においてもクラブ正会員の出場の割合が圧倒的に高くなっている。試合観戦については、約9割が有となっている。以上のことから、今後マスターしてみたいテニス技術については、比較的難しいとされているバックハンドストローク、サーブ、ボレーをあげている。さらに試合経験はあまり多くなく、練習がほとんどである。その中でもクラブ正会員がスクール会員よりは、試合経験が豊富である。

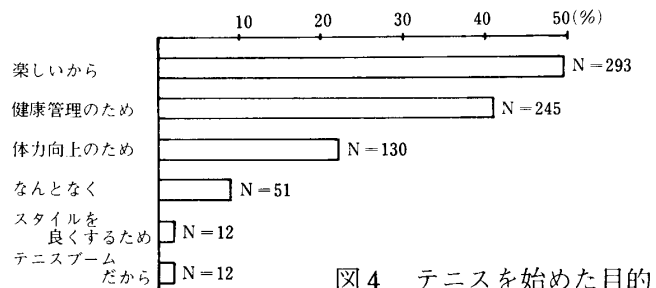


図4 テニスを始めた目的

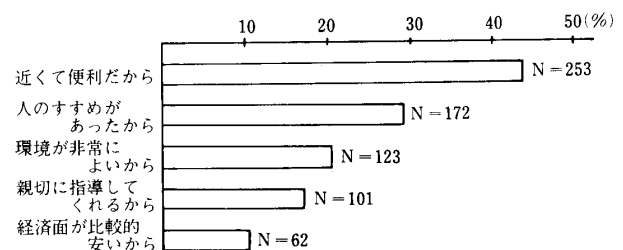


図5 クラブ入会動機

表13. 活動目的

性別	カテゴリー		勝利主義	楽しみを第1に考えている	楽しみと勝つことを同じ程度に考えている	その他
	有	無				
男性 (N=237)	有		4.2	40.9	45.1	6.3
	無		91.6	54.9	50.6	89.5
	D・K		4.2	4.2	4.2	4.2
女性 (N=351)	有		2.0	66.7	23.1	5.1
	無		92.3	27.6	71.2	89.2
	D・K		5.7	5.7	5.7	5.7

表14. テニス実施日数

カテゴリー N・%	1	2	3	4	5	6	7	D・K
N=281	86	91	46	30	12	11	3	2
%	30.6	32.4	16.4	10.7	4.2	3.9	1.1	0.7

表15. テニスクラブまでの交通時間

カテゴリー N・%	0～ 4分	5～ 9分	10～ 14分	15～ 19分	20～ 29分	30～ 59分	60～ 89分	90～ 119分	120分 以上	D・K
N=588	48	78	72	76	108	143	33	6	1	23
%	8.2	13.3	12.2	12.9	18.4	24.3	5.6	1.0	0.2	3.9

表16. 主な交通手段

カテゴリー N・%	徒 歩	自転車	自動車	バ ス	電 車	D・K
N=588	66	75	324	51	48	24
%	11.2	12.7	55.1	8.7	8.2	4.1

表18. マスターしたいテニス技術

カテゴリー N・%		グランドストローク フォアハンド	グランドストローク バックハンド	ボ レ ー	スマッシュ	サ ー ブ
有	N	213	288	255	183	262
	%	36.2	49.0	43.4	31.1	44.6
無	N	356	281	314	386	307
	%	60.6	47.8	53.4	65.7	52.2
D・K	N	19	19	19	19	19
	%	3.2	3.2	3.2	3.2	3.2

表19. 出場試合の種類

カテゴリー 有 無		レディース トーナメント の様な試合	他のテニス クラブとの 対 抗	地区の 公式戦	全 国 大 会
テニス クラブ員 (N=286)	有	28.7	37.4	27.6	4.9
	無	69.6	60.9	70.7	93.4
	DK	1.7	1.7	1.7	1.7
テニス スクール員 (N=250)	有	3.6	3.6	4.4	0.4
	無	95.6	95.6	94.8	98.8
	DK	0.8	0.8	0.8	0.8

4. 健康と身体的障害

スポーツ活動をする場合の健康状態、さらにそのスポーツを行うことによって生ずる身体的障害は、重要な意味を持っている。

まず、練習前後の準備、整理体操についてみると、約4割が、両方共軽くすることを示しているが、両方共充分にするのは(7.8%)と最も低い割合を示している。現在の身体的障害の有無については(67.5%)が何らかの身体的障害が有となっている。さらに、その身体的障害の部位については、多い順に手首、腕、肩、肘、腰となってお

表17. テニスコートの種類

カテゴリー N. %		ハード コート	ローン コート	クレ ー コート	アン ツ ー カー コート	室 内 コート
有	N	381	7	124	40	38
	%	64.8	1.2	21.1	6.8	6.5
無	N	168	541	425	507	510
	%	28.6	92.0	72.3	86.2	86.7
D・K	N	39	40	39	41	40
	%	6.6	6.8	6.6	7.0	6.8

り、テニスをやることによって生じたと思われる部位に集中している。次に食欲、睡眠、仕事についてみることにする。まず、食欲については、「あまり変わらない」(64.5%)、「進む様になった」(23.6%)となっている。睡眠については、「あまり変わらない」が(59.0%)と高く、次に、「よく寝つかれる」の(32.2%)となっている。さらに、食欲、睡眠とも、「食欲がなくなった」(0.7%)、「眠りが浅くなった」(1.0%)、というようなマイナスの作用はほとんどないといってもよいぐらいである。仕事についてみると、「あまり変わらない」が約70%であり、次に「はかどるようになった」の(16.3%)である。しかし、「少々雑になった」が低い割合であるが(5.1%)を示している。

以上のことから、テニスをすることに對しての食欲、睡眠、仕事のいずれも、あまり変わらないが一番高い割合を示してはいるが、マイナスの作用を示すものはごく少数でありプラス面の作用に影響を及ぼしているものの方が多く見受けられる。

表20. 練習前の準備体操・整理体操

カテゴリー N. %	両方共充分にする	練習前は充分にして 練習後はあまりしない	両方共、軽くする	寒い時にする程度	全くしない	D・K
N=588	46	109	234	82	48	69
%	7.8	18.5	39.8	14.0	8.2	11.7

表21. 身体的障害

カテゴリー N. %	あ る	な い	D K
N=588	397	170	21
%	67.5	28.9	3.6

表22. 障 害 部 位 397

カテゴリー N・%	腰	肩	足首	大腿	腕	手首	肘	背中	首	膝	その他 ()
有	N 93	107	49	37	117	120	98	32	11	47	15
	% 23.4	27.0	12.3	9.3	29.5	30.2	24.7	8.1	2.8	11.8	3.8
無	N 304	290	348	360	280	277	299	365	386	350	382
	% 76.6	73.0	87.7	90.7	70.5	69.8	75.3	91.9	97.2	88.2	96.2

表23. 食 欲

カテゴリー N. %	非常に食欲が進む 様 にな った	進む様 になった	あまり変わらない	食欲がなくなった	()	D・K
N=588	48	139	379	4	3	15
%	8.2	23.6	64.5	0.7	0.5	2.5

表24. 睡 眠

カテゴリー N. %	非常によく寝つか れる様 になった	よく寝つかれる	あまり変わらない	眠りが浅くなった	()	D・K
N=588	27	189	347	6	3	16
%	4.6	32.2	59.0	1.0	0.5	2.7

表25. 仕 事

カテゴリー N・%	非常にはかどる こと にな った	はかどる様 にな っ た	あまり変わらない	少々雑になった	()	D・K
N=588	20	96	407	30	4	31
%	3.4	16.3	69.2	5.1	0.7	5.3

5. スクール生とクラブ正会員

まず、クラブ正会員になるまでの過程についてみると、最初から会員になったのは(68.7%)と高い割合を示し、スクール会員を経てから正会員になったのは(31.3%)となっている。次にスクール会員のクラブ正会員への移行意志については「有る」と答えた人は3割と少なく、意志がないという人は半数にも及んでいる。さらに、それぞれの理由についてみると、「移行意志が有る」という人に関しては、圧倒的に十分な練習が欲しいとなっている。「移行意志がない」という人の理

由は、まだまだ未熟であるから(38.7%)、時間的余裕がないから(30.0%)、経済的余裕がないから(28.0%)となっている。これらのことから最初から正会員になったという人は、約7割という高い割合を示し、ある程度の技術レベルと経済的な余裕がうかがわれる。現在、スクール会員でこれから正会員になりたいという人は、技術的な向上に伴ってのテニスに対する活動欲求が高まり、より以上の練習時間を求めている。会員になる意志がない人は、技術的な未熟さをあげていることから、今後、技術の向上がみられることによ

ってクラブ正会員への移行についての再考が期待できる。

表26. 会員までの過程

カテゴリー	最初からの会員 になりました	スクール生からの 会員になりました	D・K
N = 281	193	88	0
%	68.7	31.3	0

表27. クラブ会員への移行意志

カテゴリー	は い	いいえ	D・K
N = 300	90	150	60
%	30	50	20

表29. 「いいえ」の理由

カテゴリー	まだ未熟で あるから	現状で充分満足 しているから	時間的に余裕が ないから	経済的に余裕が ないから	そ の 他
有	N = 58	24	45	42	8
%	38.7	16	30	28	5.3
無	N = 92	126	105	108	142
%	61.3	84	70	72	94.7

6. 今後のテニスブームの動向

現在、テニスを実際に楽しんでいる人達はテニスブームに対してどのような考え方をもっているのかは興味深いことである。

まず、テニスブームの原因については、地域にテニスクラブができ気軽に参加できるから（43.2%）マスコミの影響（37.2%）を主な原因にあげている。さらに、今後のテニスブームのゆくえについては、「ゆっくり伸びる」、「現状維持」のそれぞれが4割ずつと高い割合を示している。これらのことから、テニスブームの要因として、テニスクラブの創設と一流選手のプレーをマスコミが取り上げたことが貢献しているといえる。さらに、今後のテニスの発展についてはゆっくり若しくは現状のまま人々の間に浸透してゆくことを予想している。

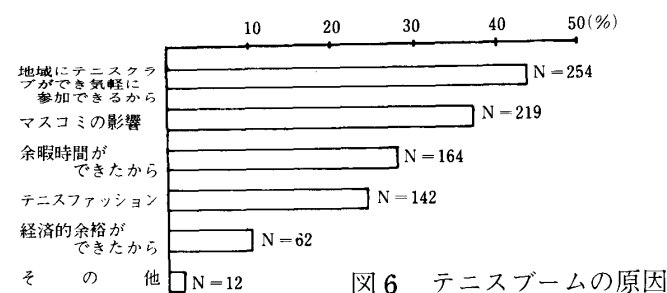


表28. 「はい」の理由

カテゴリー	十分な練習量が欲しいから	時間的に余裕が出来たから	経済的にもゆとりができたから	その他
有	N = 55	16	9	14
%	61.1	17.8	10	15.6
無	N = 35	74	81	76
%	38.9	82.2	90	84.4

表30. テニスブームのゆくえ

カテゴリー	どんどん伸びる	ゆっくり伸びる	現状維持	衰えていく	D・K
N = 588	80	241	230	29	8
%	13.6	41.0	39.1	4.9	1.4

IV. 考 察

以上、東海4県下のT・C会員の社会的特性についてその調査結果を述べてきた訳であるが、ここでは、それらの結果を大きくは、1. T・C会員と地域スポーツクラブ会員の社会的特性との比較と、2. T・C存続・発展に対する会員側の諸条件に分けて考察を加えてみたい。

1. T・C会員と地域スポーツクラブ会員の社会的特性の比較

はじめに、本調査結果で得られた現在のT・C会員の社会的特性を先に前川等が実施した地域スポーツクラブ会員の調査結果のうち共通する内容について見てみよう。

一般に地域で自主的に運営・管理されている地域スポーツクラブと、大規模な施設と会員を有し成文化された規約のもとで運営がなされている商業スポーツクラブに参加する人々の間にはどのよ

うな違いが見られるのであろうか。

まず、本調査結果のうちT・C会員の社会的属性や過去のスポーツ経験、さらにはクラブ参加状況などについて地域のクラブ会員のそれとを比較してみると次のようである。つまりT・C会員の社会的属性を見て判る通り、性別では男女の割合はほぼ等しく年令的には20代、30代が中心となっている。また職業では事務従事者や主婦が高い割合を占めていた。これらの結果については、地域のスポーツクラブ会員とはほぼ同様の傾向を示しているものの、その中でも特に年令と職業のバラツキが若干ながら異っている。それは、T・C会員の方がやや年令的には若く、職業ではいわゆるホワイトカラー層が占める割合が高いなどである。これは、若い年令層からのテニスブームの発祥が起因し、また、知的レベルの高い職種においてテニスが好まれていることを示している。

次に、過去のスポーツ経験について、T・C会員の調査結果では、その(83%)の者が中学校時代を中心に何らかのスポーツ経験を持っている。また、テニスというスポーツ種目について見ると軟式テニス経験者が約4割を占める程度で、現在までのテニス歴についても全体的にはバラツキは見られるものの3年未満の者が約5割を占めるなど、必ずしも十分なスポーツ経験を有しているとはいえない。この点について、地域の一般スポーツクラブ会員では、学生時代の運動部経験者が中心となり、その時のスポーツ種目経験を基礎に現在のクラブ活動を継続している場合が多い。このことから、現在のテニスクラブ会員は、学生時代の軟式テニスクラブ経験者を除いてその他の者は今日のテニスクラブの誕生とともにテニスを始めた人が多く、地域のスポーツクラブに比べ、初心者から上級者まで広い範囲の人々で構成されている。これは、地域のスポーツクラブのように施設や指導者があまり整備されておらず、しかも、練習計画やクラブ運営などのことも自分達で自主的にやらなければならないのに比べ、施設やコーチも整備され、練習計画やクラブ運営のことまでもあまり心配せずにスポーツが出来る現在のテニスクラブの参加様式の手軽さが多くの中級者の参加を促進している要因といえよう。そして現在の

クラブ参加状況を見てみると、T・C会員は、テニスを始めた目的や現在の活動の目的において「楽しさ」や「健康」を求める。それは、男性よりも女性に多く見られた。また、入会の動機では、第1に交通の便利さが関係し、次いで、人のすずめという「ロコミ」によって入会している場合が約3割程度見られる。日常のクラブ参加日数では週あたり1日～2日に多くが集中し、練習場所までは、半数以上の者が自動車で30分以内で通っている。これら、T・C会員のクラブ参加状況に関する調査結果は、地域のスポーツ会員のそれとはほぼ同様の傾向を示している。しかしながら、活動目的においてはT・C会員では初心者が多いことも影響し、いわゆる「勝利志向」のクラブ会員が地域の一般クラブに比べわずかながら少ないようである。また、現在のテニスクラブの立地条件が少し都心より離れた所に位置していることもありクラブまでの交通機関が少しではあるが地域のクラブ員に比べ長い時間を費やしているようである。

このように、T・C会員の社会的特性を地域のスポーツクラブ会員の調査結果と比較した訳であるが、その多くで共通している点が見られた。しかしながら、T・C会員では、比較的年令の若いしかも、ホワイトカラー層や主婦層が中心にわが国における最近のテニスブームの到来を契機にテニスクラブに入会して始めた人が多く、「楽しさ」と「健康」を日頃の活動的目的としているのが現状である。さらに、地域の自主的なスポーツクラブでは、いわゆるスポーツ経験をあまりもたない初心者がクラブに入会し活動に参加していくことが、スポーツの技術的なことなどでなかなか困難な状況であるのに対し、初心者を中心に熟練者までをクラブで包括し運営がなされているT・Cのスポーツ振興に果たす社会的役割は無視することはできない点である。

2. T・C存続・発展に対する会員側の条件

ここでは、先に取り上げなかったT・C会員の健康と身体的障害やスクール会員と正会員などの調査結果を中心に、今後のT・C存続・発展の見地から会員側の諸条件について考察を加えていきたい。

まず、会員の健康と身体的障害についての調査

結果から明らかなように、T・Cへ入会してからの食欲、睡眠、仕事などへの成果は以前とあまり変わらない者が多いようではあるが全体的にはプラス面への評価が高い。しかしながら、現在の身体的障害については約7割の者がテニスをやることによって生ずる部位の異常をうったえている。これは練習前後の準備・整理体操不足や、練習コートの種類、あるいは、練習の質と量の問題が原因であろうと思われる。特に先にも述べたようにあまりスポーツ経験がなく最近にテニスを始めた人が多いT・C会員には、それら健康管理上の諸問題について何らかの指導がなされるべきであろうと思われる。

次に、スクール会員と正会員について見てみよう。現在のT・Cには、いわゆる短期講習会（約3ヶ月程度）型に参加するスクール会員と入会金と会費を支払って自由にコートを利用出来る正会員が共存している。そもそも、スクール会員は、正会員への導入的位置づけにあり、多くのT・Cではいかに正会員を増加できるか否かに経営者の主眼が置かれていることはいままでのない。さて本調査結果からは、おおよそ、スクール会員は初心者が多く、逆に、正会員はテニス歴も比較的長く、試合経験も比較的豊富であることなどが明らかになった。また正会員の約7割は入会当初からの者であり、残りの3割の者はスクール会員を経て正会員に移行した者である。現在のスクール会員の正会員への移行意志については約3割程度しかなく意志の有る者は「練習量の確保」を求め逆に無い者は「技術的未熟さ」、「時間的・経済的余裕の無さ」をその理由にあげている。いずれの場合も、テニスの技術的レベルと経済的理由においてスクール会員から正会員への移行が容易でないことを示している。

その他今後のテニスブームの動向についてはT・C会員は「ゆっくり伸びる」や「現状維持」など比較的発展への評価をしている。とにかく、T・C会員の今後のクラブへの参加継続の意志が有る限りT・Cは存続・発展してゆくことが予想される。しかしながら、商業ベースでT・Cが運営・管理されている以上、正会員を多く有することも重要な点である。そのためには、スクール会員を

中心とした初心者指導を充実することも必要であり、スポーツ障害も予防する様にしなければならない。他方、正会員においては、そのテニス欲求を充足させるべく練習場所の確保や試合の機会を提供しなければ正会員になるメリットも無くなるであろう。いずれにせよ、T・C会員の特性にあったテニス指導やクラブの運営のあり方が基本であり、その意味ではこの種の研究の積み重ねが重要であると思われる。

尚、本研究ではT・Cそれ自体がもつ集団的条件については取り扱っておらず、今後はそれも含めたT・C存続・発展の要因の解明を研究の課題としたい。

V. 要 約

本研究を通して、次のようなテニススポーツクラブ会員の社会的特性が明らかになった。

1. 社会的属性

性別では男女の割合はほぼ等しく、年齢では20・30代が中心に、職種ではホワイトカラー層や主婦が多く見られた。

2. 過去のスポーツ経験

過去に何らかのスポーツ経験をもったものが多いが、テニスも含めた運動部経験者は少なくテニス歴も3年未満が約5割を占めている。

3. 現在のクラブ参加状況

テニスを始めた目的では「楽しみ」や「健康管理」、入会の動機となったのは「近くで便利」が高い割合を占めている。

クラブへは、週あたり1日～2日参加し、交通機関は主に自動車でおおよそ片道30分以内の時間を費やしている。

また、利用するコートは約65%がハードコートである。試合経験はあまり多くなく、技術練習が中心である。

4. 健康と身体的障害

クラブへ入会してからの食欲、睡眠、仕事などへの成果は、以前とあまり変わらない人が多いが全体的にはプラス面への評価が高い。

現在の身体的障害については約7割の人がテニスをやることによって生ずる部位の異常をうったえている。

5. スクール会員と正会員

正会員のうち入会当初から正会員であった人は7割で残りの3割がスクール会員から正会員に移行した人である。現在のスクール会員の正会員への移行意志については約3割程度しかなく、有る人は「練習量の確保」を求め、逆に無い人は「技術の未熟さ」や「時間的・経済的余裕の無さ」をあげている。

6. 今後のテニスブームの動向

テニスブームの原因については「地域にテニスクラブができた」ことや「マスコミ」の影響などをあげている。

今後のテニスブームのゆくえについては、「ゆっくり伸びる」や「現状維持」など比較的發展的な評価をしている。

謝 辞

本研究を進めるにあたって、調査結果の集計などについて協力していただいた本学大学院研究生の川西正志君及び山本秀人君並びに、本調査を実施するに際し御協力いただいた各テニスクラブの関係各位に心から感謝の意を表します。

引用文献

- 1) 総理府、「体力・スポーツに関する世論調査結果」
昭和54年4月1日
文部省体育局監、「体育・スポーツ指導実務必携」
昭和57年度版行政 P. P1121—1148
- 2) 中島豊雄、他5名「地域スポーツ集団の存続と変容—
津市婦人バレーボールクラブの事例研究」
名古屋大学総合保健体育科学
3(1)、P. P81—97、1980
- 3) 前川峯雄、梅村清弘編、「地域社会におけるスポーツ
クラブの発展に関する研究成果報告書」
1981. 4
- 4) 永吉宏英、他2名、「子供のスイミングクラブ入会要
因の分析」 体育の科学
26—6: 431—435, 1976.
- 5) 小泉東海雄、「スポーツ・クラブの現状と問題点—ス
イミングコーチに対する意識調査」
日本体育学会第32回大会発表
- 6) ベースボールマガジン社編「テニスマガジン」VOL9.
No. 4.
昭和53年4月号別冊 P. P44—64
- 7) 前川峯雄、梅村清弘、前掲書